

物語に基づく医療

細野診療所 広島診療所
山崎 正寿

1998年、イギリスの医師のグリーンハルとハーウィッツは「物語に基づく医療 (Narrative based Medicine NBM) —臨床における物語りと対話」という本を編集した。二人の医師は「根拠に基づく医療 (Evidence based Medicine EBM) を長年取り組んできたなかから、臨床において患者自身の体験を理解し、患者との良好なコミュニケーションを保つことが大切であることに気付き、NBMの重要性を主張している。EBMによる医療はえてして人間を全て同一のものとして扱う、まさにそのことによって、素晴らしい効果を発揮するものもあるが、人間それぞれが全く異なっているとして扱うことによって、その効果を発揮するものもあることに気付かねばならない (米国医師 ブロディ)。

たとえば、患者の病歴を取る場合でも、現代医学のEBMでは標準化された形式にのっとった病歴が良いとされ、病気の診断に必要な症候をいかに引き出してくるかが重要となり、個々の症例の特別な事情やその経緯などは、病気の診断には無用とばかりに無視される。時には余計なことは言うなと叱られる。

病気の治療においても、気管支喘息と診断がつけば、老若男女を問わず吸入ステロイド剤を主とした、気管支喘息治療ガイドラインによる治療が行われる。Aさん、BさんとCさんの気管支喘息では、その経緯も発作をきたす状況も異なっているにもかかわらず、エビデンスに基づく標準治療が行われる。

ある中年女性の気管支喘息患者は、風邪をひいて以来咳と呼吸困難をきたしているが、同時に副鼻腔炎も併発して後鼻漏が常にある。呼吸器科の医師はステロイドの吸入や内服を続け、発作時はやはりステロイドの点滴静注をおこなうだけで、一向に副鼻腔炎の訴えに耳を貸してくれない。この女性の喘息の経過についてよく問診をしていけば、副鼻腔炎と喘息の密接なつながりに気付くはずである。漢方治療によりこの副鼻腔炎を治療し改善することによって、喘息発作は軽減し点滴治療をすることもほとんどなくなってきた。

EBMは統計学という手段を用いてエビデンスを作り上げる。たとえば癌にかかり適切な治療を受けた後、この癌のこの状態であれば平均寿命はあと何ヶ月ですというような、まるで神様のご宣託のような言葉が発せられる。この平均値とか中間値というものが曲者であり、決して事実を述べているのではなく、抽象的な概念にしかすぎない。むしろ患者の心を不安にし、希望の芽をつんで悲観的な気持ちを抱かせてしまう。癌の予後というものには平均値より短いものもあれば、何倍も長いものもあるというのが事実であろう。個々の症例によって異なることがあるという事実を知らせるべきであり、画一的で抽象的な宣言はすべきでないと思

う。

NBM は個々の症例の物語りに耳を傾けることによって、その症例の病気の個別性に注目し、新たな発見や研究が始まるといわれている。そして何よりも患者のおかれた状況に共感し、心を通わせることができる。現代はデータ優先の医療が横行し、患者は医療機関にかかっても納得できる医療を受けていないと感じることもある。だからといって、全くエビデンスに基づく EBM を否定するのではなく、NBM は EBM を補完するものとされている。EBM でもオーダーメイド治療だとか、遺伝子治療など、個別性を重んじる分野も出てきている。また NBM もこれからさまざまな発展があると考えられ、両者の進歩が良い医療の実現に寄与すると考えられる。

それにしても、この NBM の内容を知れば知るほど、漢方医学の随証治療との類似性を思わずにはおれない。